

アジア安全特集：中台の軍事衝突は日本を巻き込む

漢和防務評論 20150703 (抄訳)

阿部信行

(記者コメント)

漢和防務評論に、中台の軍事衝突の形と日本の採るべき方策に関する記事がありましたので紹介します。

結論は、米国の対応次第で日本の採るべき対応が決まるというものです。中台両国の戦闘間に台湾軍機が沖縄県の飛行場に緊急着陸する場合の対応について、a. 完全拒否 b. 緊急着陸は認めるが発進は認めず機体を抑留する。c. 台湾軍を全面支援し、日本も参戦する。この3つの方策を提示しました。

いずれにしても日本は、あらゆる状況を想定して研究しておかねばならないというのが KDR 平可夫氏の助言です。

平可夫

この4月、米軍の F-18C 戦闘機 2 機が台南飛行場に緊急着陸した。中国は、陰謀だと述べた。米軍の作戦規則、歴史経験、実例、当時の飛行状況等々から判断して、本誌は、米国が中国に何かを暗示する目的で”緊急着陸”を行った、とは見ていない。中国に暗示する方法はいろいろあり、緊急着陸のような危険を冒す必要は全くない。如何なる問題においても米軍が第一に考慮するのは人命である。従来から命を賭けるような方法は採用しない。

この事件は、本誌にとって、もし中台間で戦争が勃発し台湾の基地が破壊された場合、大量の台湾軍戦闘機は何処に緊急着陸するかを研究するきっかけになった。まず結論から言えば、日本及びフィリピンは戦争に巻き込まれる可能性は高い。

まず第一に中国側の破壊能力を見る。

中国甘肅省鼎新飛行場付近に設定された”台湾軍清泉崗空軍基地の模型”及びウルムチの第二砲兵射爆場における”日米の模擬 F-15 戦闘機に対する模擬攻撃”の一連の衛星写真を通じて、KDR は、中国空軍及び第二砲兵の台湾軍及び沖縄飛行場攻撃に関する若干の構想を入手することが出来た。

現在、中国は、空中発射、陸上発射、及び潜水艦発射の対陸上攻撃用巡航ミサイル、精密誘導爆弾、終末誘導能力のある弾道ミサイルを大量に保有している。中国軍の上記の攻撃演習から推測出来る攻撃モデルは以下の通りである。

滑走路に対する直接攻撃は、主として精密誘導空対地ミサイル及び爆弾を使用する。爆撃による巨大な弾痕は滑走路を使用不能にする。エプロン地区に対しては燃烧型子母弾攻撃を行う。この攻撃方式は第二砲兵が主として行う。クルレの第二砲兵基

地の写真が参考になる。燃料タンク、付属施設、指揮関連施設に対しては、弾道ミサイル子母弾、巡航ミサイル攻撃を行う。

第一次湾岸戦争時における米軍のイラク空軍飛行場（28 箇所）に対する攻撃方法を見ると、米軍は主として GBU-27、GBU-24 型誘導爆弾を使用して航空機格納庫を重点的に攻撃した。英国軍は、戦闘機及び対滑走路爆弾を使用して滑走路に対する直接攻撃を行った。

このことから、滑走路を爆撃し敵の作戦機の発進を阻止することが、低コストの飛行場攻撃方式であることが分かる。中国側も重点的にこの種の攻撃方式を選択し、台湾軍戦闘機の発進を阻止し、或いは発進後の飛行場を着陸不能にするものと思われる。こうすれば、中国空軍は台湾空軍との空中戦は必要ない。

注意すべき問題は、中国軍の台湾に対する第一波攻撃が飛行場攻撃であることだ。第二砲兵の文献の中には、この問題について「第一波攻撃」及び「爾後の攻撃」と記述されている。それぞれの攻撃手段は厳格に定義されている。

「第一波攻撃」とは、最初に戦術弾道ミサイルを用いて敵の機能を麻痺させ、台湾軍戦闘機及び米軍戦闘機の発進を不能にすることである。

「爾後の攻撃」とは、台湾軍作戦機の大規模編隊が発進した後、滑走路、燃料タンク等を攻撃し、台湾軍の F-16、ミラージュ、IDF 戦闘機が在空間に継続して滑走路を攻撃破壊し、台湾軍作戦機が飛行場に帰還出来ないようにすることである。（もし中国以外の周辺国が台湾軍戦闘機の着陸を拒否した場合）中国福建省の飛行場に着陸せざるを得なくなる可能性も考えられる。

近年来、福建省の前沿飛行場には大量の無人機が配備されている。これは機を失せず攻撃効果を判定するために用いられる。このような方法は、米軍の戦法と同じである。攻撃効果の判定終了後、直ちに第二次、第三次攻撃の要否を決定する。台湾軍の”漢光”演習においては、台湾軍は迅速な滑走路修復能力を展示した。台湾軍は演習中、滑走路修復用鋼板を使用し 90 分以内に同時に 7 個の弾坑を修復した。このほか台湾軍は、高速道路を利用した戦闘機の離発着訓練を何度も演練した。NATO 国家の滑走路修復能力は、通常 2.5 乃至 3 時間以下である。この水準は、米軍や NATO 部隊にとっては十分である。その理由は、(1) NATO の地域は、広く平らな陸地と縦深性があり、多くの飛行場があり、敵軍は NATO 軍の全ての飛行場を破壊するのは不可能である。(2) NATO 軍の多くの戦闘機は空中給油能力があり、滞空時間が長い。

このような NATO の有利な状況は中国側にも該当する。福建省の前沿飛行場、江西省の第二線飛行場が破壊された場合、在空中の大量の J-10、SU-30MKK は、機を失せず第三線飛行場に着陸できる。また双発戦闘機は単発機に比べ、航続距離が長い。これは台湾軍戦闘機に比べ、中国軍戦闘機の利点でもある。

台湾軍が 90 分以内で滑走路の修復が出来たととしても、中国軍の第二砲兵及び空軍は、第二次、第三次の精密攻撃を行う能力がある。このほか台湾の戦闘機は空中給油能力がなく、空中に 90 分も在空することはできない。これは有事に台湾西岸の飛行場が直面する状況である。

台湾東岸の飛行場で主なものは地下格納庫を有する花蓮基地である。東岸の地下格納庫を有する 2 つの飛行場は確かに西岸の飛行場に比べ航空機の温存が容易である。同時に台湾中央山脈が衝立効果を発揮する。中国空軍戦闘機が東岸の飛行場を精密爆撃するためには、台湾東岸に進出する必要があり、そうすれば航続距離及び滞空時間で制約を受ける。同時に東岸の航空優勢を獲得する必要があり、攻撃の困難性は高まる。

2014 年の珠海航空ショーで、中国の花蓮飛行場攻撃に関してある種の想定を発見した。CASIC (CHINA AEROSPACE SCIENCE & INDUSTRY CORPORATION 中国航天科工集团公司) は、CM-708UNA 潜水艦発射型対艦ミサイルを展示した。説明によると、潜水艦とセットで輸出するという。慣性誘導+衛星誘導+アクティブ誘導システムを採用し、射程 128 km である。これは類似ミサイルのホーミングシステムを改良するだけで陸上攻撃ミサイルに転換できる。またロシアの 3M-14E 等に類似しており、CLUB ミサイルファミリーの一員である。すでに輸出できるということは、中国海軍の 039B 型ディーゼル潜水艦がこれに類似した更に射程が長いミサイルを搭載する可能性がある。新時代の 093G-2 型核攻撃潜水艦もまた潜水艦発射陸上攻撃武器を携行することが出来る。また東岸飛行場への潜入攻撃を行う蛙人特種部隊（frogmen）を搭乗させる。

したがって台湾東海岸の花蓮飛行場攻撃においては、洞口の入り口を破壊するため潜水艦発射対陸上攻撃ミサイルが使用される可能性が最も高い。花蓮基地には全部で 8 個の洞口があり、一旦破壊されると作戦機は離陸不能になる。

このほか第二砲兵は、射程 1000 乃至 1200 km 以上の DF-16 等の戦術ミサイルを開発している。なぜ特別にこのクラスの弾道ミサイルを開発したのだろうか？理由の一つは、沖縄を攻撃するためである。もう一つの理由は、高弾道方式で花蓮飛行場の燃料タンク及び滑走路を子母弾攻撃するためである。

結論：中国軍の空中発射・水中発射の各種精密誘導兵器の発展、及び戦術弾道ミサイルの各種弾頭の開発状況、更には大量の無人機が部隊配備されている状況を考慮すると、中国軍は、すでに台湾軍の各飛行場の滑走路を連続して破壊できる能力を有すると推測される。

引き続き想定される状況は：滑走路が一旦修復中の状況になると、台湾軍の在空戦闘機は何処に着陸するのだろうか？第一次湾岸戦争の例を述べる。實際上米軍の作戦は極めて精密、聡明であり、一部では「爾後の攻撃」方式を採用した。すなわち

一部のイラク空軍機 MIG-29、MIG-25 及び 2 機の A-50 早期警戒機が離陸した後、滑走路を破壊した。在空中の作戦機は引き返すことが出来ず、隣国の飛行場に着陸するか、空中で航空機を放棄するしかなかった。イラク空軍機は、戦わずして戦場から退出するしかなかった。

これらのことから、KDR が反復論証した内容は：台湾軍戦闘機の一部は、日本及びフィリピンの飛行場への着陸を求めざるを得なくなることだ。

日本について述べると、台湾東北部に最も近い飛行場は次の通り。

与那国島飛行場：花蓮基地からの距離は 150 KM、滑走路の長さが 2000 M、エプロンは 90×130 M で、推算すると F-16 戦闘機が 10 乃至 15 機収容可能である。しかし F-16 の離着陸には着陸拘束装置（バリヤー）の設置が必要である。

石垣島飛行場：花蓮基地からの距離は 268 KM、滑走路の長さが 1500 M、戦闘機の離着陸には不十分である。C-130 の離着陸は可能である。

宮古飛行場は状況が同じであり、滑走路の長さは 1500 M である。

伊良部島飛行場：滑走路の長さが 3000 M、エプロン面積 490×170 M、花蓮基地からの距離は 377 KM、台北から 364 KM。KDR の推測では、実際に開戦となれば、台湾空軍がこの飛行場を緊急着陸基地として選択する可能性が最も高い。

宮古島飛行場：滑走路の長さ 2000 M、エプロンの広さ 260×120 M、花蓮基地からの距離は 386 KM である。ここも台湾軍戦闘機が着陸する可能性がある。着陸拘束装置（バリヤー）の設置が必要である。

沖縄本島の飛行場群：花蓮基地からの距離は 661 KM。戦闘機を受け入れる容積は大きく、琉球地区で唯一の軍用飛行場群があり設備も整っている。

次に、日本政府が決断する時期を検討する。日本政府が選択できる方策は以下の通り：

A. 台湾軍戦闘機の着陸を拒否し滑走路を封鎖する：これは、台湾軍戦闘機の退路を断つことを意味する。

B. 台湾軍戦闘機の緊急着陸を受け入れるが戦争終結まで航空機は抑留する：これは、外交上、中国を必要以上に敵視することにはならないが、戦後の外交に困難さを増す。航空機を返還するには誰と交渉すれば良いのかなど。

C. 台湾軍戦闘機の緊急着陸を受け入れ、後方支援を提供し、台湾軍戦闘機を継続して参戦させる：これは徹底して中国に敵対し、中国側の軍事攻撃を受ける可能性

がある。日米は参戦を迫られる。

上述の日本の採り得る方策の中で最も重要な要素は、”東京は、ワシントンの意向を考慮せざるを得ない”ことである。

一、ワシントンが直接軍事衝突に介入しない場合、東京が B 又は C を選択する可能性はますます低くなる。

二、ワシントンが部分的に軍事衝突に介入し、台湾に対し間接的な後方支援を行う場合、東京は B を選択する可能性が高い。

三、ワシントンが徹底して参戦する場合、東京も戦争に介入し、C を選択する可能性が高い。

日本の防衛省は、図上演習の実施を含め、上述の危機管理問題について万全の準備を整えておくべきであると KDR は、考える。

南部のフィリピンの状況は次の通り。

一旦開戦となれば、台湾の東西南部の作戦機は、滑走路が破壊されたのち、フィリピンの飛行場に緊急着陸せざるを得なくなる。台湾から最も近いフィリピンの外島の飛行場はすべて戦闘機が着陸できない。台湾から最も近い緊急着陸を検討できる飛行場は、フィリピン本島の TUGUEGARAO である。滑走路の長さ 1950 M で、C-130 の離着陸は問題ないが、戦闘機の離着陸条件は満たしていない。確実に緊急着陸を検討できる最も近い飛行場は、GEOHACK/LAOAG 飛行場である。距離は台南から 533 KM、滑走路の長さ 2450 M である。エプロン面積は 390×50 M で、F-16 が 20 機以上駐機できる。

クラーク空軍基地は、台南からの距離 864 KM、3000 M の滑走路を有し、面積が広く補給条件も極めて良い。その他大型の軍民両用飛行場は、マニラ以南の中南部にある。マニラは台南からの距離が 936 KM である。

残る問題は、日本と同様、フィリピン政府の政治的決定によって決まる。2013 年から中国との間で発生した島嶼紛争に対する姿勢から見て、大きな経済力、軍事力、政治力を有する日本に比べると、フィリピンが中国の圧力をはね返すことが出来るとは KDR は考えていない。米菲共同防衛条約は、主としてフィリピンが攻撃を受けた場合を想定している。この条約は、日米安保条約とは性質を異にする。前者は大部分 2 国間に限定されるが、後者は、ますます区域を強調する性格が強まり、中国、北朝鮮を想定している。

したがってフィリピンの選択できる方策は、日本と同じ 3 種類である。最も楽観的な予測は、人道上の理由により航空機を抑留し、戦争終結後に返還することである。当然、日米が完全に参戦していた場合は、米国の要求の下、米軍戦闘機、水上艦艇がフィリピンに進駐する。こうなれば台湾戦闘機がフィリピンの後方支援を受ける可能性がある。しかしこの可能性は極めて低い。

以上